

桜、桜、春爛漫のイースターおめでとうございます。



ヴインデ牧師が祝福のカードを送って下さいました。ドイツの画家 Martin Schongauer (1445-1491)の *Noli me tangere* (わたしに触れるな)の絵(左)でした。私が好きなイタリアのルネッサンスの画家 Fra Angelico (1395—1455)の絵(右)と全く同じ構図のものです。このラテン語のタイトルで多くの画家たちが、復活して、ガリラヤに行こうとするイエス様とマグダラのマリアの姿を描いていることを知りました。



四つの福音書は、空の墓を見、天使から復活したイエス様について最初に知り得た人々は、マグダラのマリアを筆頭とする女性たちだと記しています。記述には多少矛盾があります。

◎マタイ福音書ではイエスが行く手に立っていて、「おはよう」と言われたので、婦人たちは近寄り、イエスの足を抱き、その前にひれ伏した。(28:9)

◎マルコ福音書では、空の墓で、天使の言葉を聞いて、正気を失い逃げ去ったと記され、後世にイエスは…、復活して、まずマグダラのマリアにご自身を現わされた。(16:9)と加筆されています。

◎ルカ福音書では、天使が現れて、なぜ生きておられる方を死者の中に探すのか。あの方はここにはおられない。(24:5)と言って、女性たちにイエス様の言葉が伝えられたただけでした。

◎ヨハネ福音書では、マグダラのマリアだけが空の墓の外に立って泣いていると、イエスが「マリア」と言われると、彼女は振り向いて、ヘブライ語で「ラボニ(先生)」と言った。イエスは言われた。「わたしにすぎりつくのはよしなさい。」(20:15)と生々しいやりとりを記しています。

復活されたイエス様は「霊の体」ですから、触れたくても触れることはできないはずですが、おそらくマタイ福音書は当時の目下の者の挨拶の仕方を記録したのではないのでしょうか。日本でも江戸時代までは土下座し、頭を土に擦り付けるのが下々のなすべき挨拶でした。

Noli me tangere (私に触れるな)は、聖書がイエス様の言葉として、復活した姿を現世に求めることはできないと教えているのでしょうか。けれども、イエス様にしがみつきたい、抱かれない、支えられたい、触れたいと願う人間の想いをご存じで、それ以上のすばらしさを、イエス様は弟子たちに告別説教の中で、はっきりと告げているのです。かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたの内におり、わたしもあなたがたの内におり、わたしがあなたがたの内におり、あなたがたに分かる。(ヨハネ 14:20)とあります。私たちが触れようとしなくても、イエス様の中に私たちが生かされていて、私たちの中にもイエス様がおられるという霊の交わりに生きることがイースターに始まるのです。私たちは肉の思いが強く、現実的な手ごたえ、実感を求めて、霊の体であるイエス様との交わりの恵みを忘れてしまいがちです。

ヴインデ牧師は去年ご夫人を長い闘病生活の末に、天に送られました。そのために一言付け加えて書いてこられました。「妻を数カ月前に亡くし、それゆえに特別に今年は、キリストの復活のイースター祭を喜びながら待っています」と。悲しみの中にあっても、キリストの内に共に生きる喜びを教えてくださいました。私もパウロの言葉をかみしめながら、イースターを迎えました。生きているのは、もはやわたしではありません。キリストがわたしの内に生きておられるのです。わたしが今、肉において生きているのは、わたしを愛し、わたしのために身を献げられた神の子に対する信仰によるものです。(ガラ 2:20)